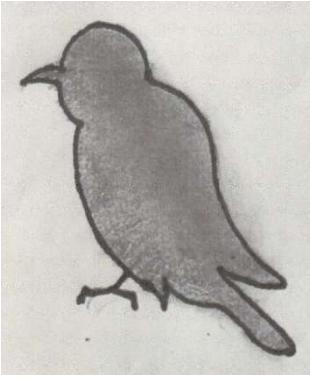
第１８８号

芥川だより

発行日＊２０２２年９月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊



神仏の魔力に負けぬ自立心

世界中に戦争など混乱があふれている。いかに人間とは愚かでどうしようもないかという事を知らしめている。何か事が起きると誰かに責任を押し付ける。私は何も悪くはない、社会が悪い、政治家が悪い…とまくし立てる。

統一教会と政治家のつながりでも、落ち着いて考えれば当たり前に起きることだ。そうしなければ当選しないからだ。政権を狙う政治家は、いかに多くの票集めをするかを模索し宗教団体など団体に近寄るし、団体は政治家を広告宣伝に利用し詐欺的な組織をさもまともな社会的な団体へと印象変えを狙うが実態は何も変わらない。宗教団体の詐欺的な集金方法は政治家のそれをはるかに超えている。

人から聞いた話でも、宗教団体の狂信的な金への執着は強い。何故かと言えば、金無くして活動は出来ないし維持も出来ないからだ。これは政治団体でも同じではあるが、政治団体は選挙や法律によって規制があるから少しはましだ。宗教団体は何でもやる闇の世界だ。

熱心な信者とみれば魔の手が忍び寄る「信仰心を更に深めるために聖地にある学校に子供さんを留学させられたらいかがですか」子供は熱心な信者の親に強制されるかのように聖地の学校に行ったが、周りの人たちとうまく協調できず精神的な病になった。学校の先生と幾度も話し合いをしたが寄付金が増えるばかりで息子の精神状態は悪くなる一方なので帰国させて施設に入れていると言われる。しかし、宗教心は消えず今も続いている。宗教の持つ恐ろしい力は新興宗教だけではない古くからの仏教でも同じような事を聞いた。すべての宗派を調べたわけではないが、本山への上納金もいろいろみたいだ。億万長者の所へはなにがしかの宗教が寄付金目当てにすり寄っていく。

心が悩みに迷い隙間だらけになり、誰かにすがりたい心になれば神仏が簡単に入り込む。一度入れば、なかなか出ていかない。一生を左右してしまう。神仏に頼らない精神的に自立した人間になって人を惑わす神仏のご加護を吹き飛ばそう。

死をめぐるあれやこれ（９４）　石川　吾郎

留学生三十万人以上の愚

この八月末、岸田首相が外国人留学生三十万人を見直し、さらに増員の受け入れを目指すと表明したというニュースが出た。貧困化により高等教育を受ける自国国民の権利が侵害された状況がますます深刻になっているのにかかわらず、だ。◆私たち七十年代初めに大学に入学した世代は、国公立大学の学費は一万二千円だった。月額ではない。年額だ。この安さのおかげで私のような地方都市の貧しい職人の息子が大学を卒業することができた。◆私たちの在学中に、学費の値上げの政策が発表され、学費値上げ反対闘争が盛り上がった。私もそのデモに参加したものだった。当時、二十年先には数十倍に学費を値上げするとされた。しかしそれにはとても現実味が感じられなかった。だが今振り返ると、まさにそれが実現されてしまっている。◆学生の多くは今、「奨学金」というサラ金の返済を背負ってでないと社会に出られなくなっている。そして若者たちはそれが当たり前の運命とあきらめているようにも見受けられる。しかしこれは政策により作り出されたものだ。政策を変えることで状況は変えられる。そのことを日本の若者たち、つまり私たちの子供の世代は実感として感じていないようだ。◆この状況で留学生三十万にさらなる上積みとは、狂った政策以外の何ものでもないだろう。学費の負担を限りなくゼロに近づけて自国の若者の教育を受ける権利を保障するのが、まともな国の義務であり、未来の世代の人材をはぐくむ最重要の方法だ。教育を受ける権利を保障しない国の未来はない。

芥川だより一八八号　目次　ページ

巻頭エッセイ	下村嘉朋	1
巻頭コラム94	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　１０２	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談52	祖蔵哲	3
大峰奥駆道58	下村嘉朋	6
新型コロナウイルス愚考　その25	明石幸次郎	6
オクラの山たより72	因了生	7
隠された歴史47	満田正賢	10
プロパガンダに騙されるな		
学び直そう戦争と憲法の歴史（六）	成瀬和之	12
俳句	土田裕	13
	影山武司	13
編集後記	ＳＫ生	13
ふみの道草51	山椒魚	14

素老人☆よもだ帳（１０２）

坂本　一光

◆人間をうたうと笑いが生まれる

ずいぶん前の『芥川だより』にも書いたことがあり、いやいや前号にも書いたことと一部は重複する内容を含むのであるが、表題のことに関してもう一度、素老人の思いを整理して記すことをお許し願いたい。

○砥部焼の亡父の壺にいる伍健

松山市に隣接する砥部町は私の故郷で焼き物の町である。子規の影響は絶大で、明治生まれの無学な父は若い頃から俳句を捻っていた。その父が三十六歳の時に「昭和十八年十一月」と記した砥部焼の壺を焼いた。壺には父が描いた七福神が楽しそうに笑い「考へを直せばフット出る笑ひ」の句が踊っている（写真）。

考えを直せばふっと出る笑い　伍健

私は長い間この句を父の下手な俳句だと思い込んでいた。山陰の町の大学で二十六年間教員をしたが、学生や職員と向き合うとき、私のなかにはいつでもこの句があったように思う。学生や教職員がしでかした、飛んでもない問題が持ち込まれるたびに、「ワハハハ、そんなことがあったん」と笑い飛ばすことから話が始まったように思う。「先生、笑い事じゃないですよ」と言われたものだが、怒ったり嘆いたりする前に、無責任かも知れぬが「考えを直せばふっと出る笑い」もあるのだと思っていた。

十四年前に、六十歳で大学を辞め妻の故郷大分に帰って来た。数年して妻の中学時代の恩師である番傘の同人・首藤弘明先生に誘われて川柳を始めた。父の下手な句と思っていたものが、なんと松山の名だたる番傘柳人・前田伍健の代表句であると知ったのは、私が同人となったつい四年前のことである。『前田伍健の川柳と至言』(新葉館出版、二〇〇四年)に、

「昭和二十年七月二十六日深夜に、松山市を襲ったB２９による爆撃で、市街地の大半は焦土と化した。この時、失意の市民を救ったのが前田伍健の〝考へを直せばふっと出る笑ひ〟だった」

とある。

それにしても、俳句に多少の興味があったに過ぎない父が、昭和十八年にどうしてこの川柳を知ったのだろう。不思議に思っていたが、その二年後に焼野原に張り出されたこの句が多くの失意の人々に再起する勇気を与えたとき、この一句は俳句の町で時代に対峙していたのであり、そういう力のある言葉は、俳句であるか川柳であるかなどに関わらず人々の共感を呼び広がっていたのだと思う。言葉には翼があったのだ。

父の残した壺を見るたびに、私は自分が今、下手な川柳を詠んでいることに不思議な思いがしている。話らしい話もしたことが無い父の導きのように思える。

○人間をうたうと笑いが生まれる

それこそが川柳だと思っている。思いはまことに素直であるが、父の壺にあるような句が詠めない。なぜかついつい笑えない、真面目な句を詠んでしまう。「忖度」が話題になると、

忖度の後ろの正面だーれだ

忖度をすればほんのり紅がさす

などと詠い、「道半ば」と言われると、

道半ばまるで一本道のよう

などと詠う。どんなに争っていても「汝の敵を愛せよ」と言われると、

汝の敵愛する前につくらない

と言い、挙句の果てに、

世の中は真面目に見ると面白い

生真面目な自分を笑う憤る

骨の無い叙情ばかりがいやになり

などと言う。「ワハハハ」と笑う男には、思わずクスッと笑えるような句は出来ないのだろうか。

○万物の霊長などと言うジョーク

人間はまことに考える葦か
と言ってもいい。
森羅万象人間というひとかけら

に過ぎない人間が、出来ることなら何でもしていいのだろうか。世の中のさまざまな事象現象に接し過度に穿った見方をしてしまう。原発事故やロシアによるウクライナ侵略。あるいは温暖化に関わる水の話、川柳の種は尽きない。

安全の神話が水に流される
ふるさとの神など捨てよ再稼働
大いなるロシアに新た罪と罰
戦雲の彼方に昇る春北斗
万緑のウクライナにも呱呱の声
方円に従う水に諭される
人が住む星でなくなるかも知れぬ

○しあわせは出会った人のおくりもの

♪出会った人の数だけ／幸せになれるなら／歩いた峠の道のりだけ／やさしくなれるなら／空には風／大地を流れる川／生きて行く限り／歩き続けるだけさ♪

数十年前に聞いた河島英五の「生きる」という歌を、今でも時折思い出し口にすることがある。幸せとか優しさというものは、このように歌うものであったかと教えられた。川柳なら、どう詠うだろう。

しあわせは出会った人のおくりもの
一つ山越えてやさしさ深くなる
人はみな銀河を生きるひとしずく

思わず苦笑してしまうような句しか詠めなくても、なぜ詠い続けているか。五七五が「生きてゆく心のかたち」であるからだろう。「万物を溶かして深くなった海」のように、川柳の世界は広く深い。

（かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（52）

祖蔵　哲

安倍元首相の国葬問題はますます混迷を深めている。国論を分断し、強硬に政治を行うのはアメリカ発の方法であるが、それほど日本の民主主義も政治レベルでは専制的になってきている。もともと確たる政治思想もないポピュリスト議員達が国政に携わり権力の味を知ると専制的に変化していく。それらの政治家が政党は違えど「敵と味方」のロジックによって思想的にはまとまる。統一教会問題がこの典型だ。このような専制的政治体制が日本の民主主義で起きている。専制政治は中国、ロシアだけではない、アメリカも日本にもである。政治の腐敗はもう理屈や論理などでは説明できない領域に入ってきている。語るに値せずだ。

8月24日、ウクライナ戦争は半年を経過したが一向に止む様子はない。むしろ拡大傾向がみられる。その日は旧ソ連からの31回目の独立記念日、ウクライナの大統領ゼレンスキーは停戦交渉に応じる用意はないと言い切った。その理由が「ミンスク合意のトラウマ」である。

「ミンスク合意」とは、ウクライナ東部で2014年に勃発した紛争をめぐる停戦合意。紛争は、2014年春、ロシアが親ロシア地域のクリミア半島を併合し、その後も親ロシア派武装勢力がウクライナ東部の地域ドネツク、ルガンスクの一部を占拠して始まった。独仏の仲介により「停戦合意」がなされた。しかし、今年2月、ロシア・プーチン大統領はドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国の独立を一方的に承認した。ウクライナとしては安易な停戦合意が領土割譲の条件となったと考えているのであろう。であれば、この戦争は失地回復戦争になるだろう。いずれにせよ、対立や紛争の根は深い。領土と歴史問題、空間と時間はどこまでも遡れる。「ウクライナの平和」はいつ訪れるのだろう。

さて、先月までは、しばらく「戦争」について哲学をしてきた。いわゆる5W1Hでいえば、What哲学問題は「戦争とはなにか」、How方法論は「戦争正当化論理」、Whyは「戦争原因―目的」、Who主体問題は「主権」、そしてWhere,Whenは「歴史記述問題」に対応する。そこで今月は再度、哲学問題として「戦争」の対概念とされる「平和」について問うてみる。

（1）平和とは何か～戦争と平和

「戦争とは何か」を今まで考えてきたが、一方で改めて「平和とは何か」を考えることも自明ではない「哲学的問い」である。辞書には平和とは「戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること」とある。

まず平和は状態である。しかし、これは自然状態であろうか。ホッブスやロックの「社会契約説」を持ち出すまでもなく平和は人間が作り出し維持しなければならないものである。平和は自然に訪れ、ずっと続くものではない。しかし、この定義ではとりあえず「戦争がない状態」を平和としている。

このように、平和はしばしば戦争と正反対の概念として対照され、戦争哲学においてもその本質や戦争との関連が論じられてきた。現在もなお、国際関係にお

いて「平和」は戦争が発生していない状態を意味し、戦争は宣戦布告に始まり平和条約をもって終了し、これにより平和が到来するとされている。つまり、互いに信頼に基づく「法的約束」によって平和状態を維持しているのである。しかし、この「約束」は常に不安定なものである。一方が破棄すれば自動的にそれは反故にされる。このような現実は幾度となく歴史が繰り返している。

（2）「戦争がない状態」消極的平和

条約や同盟は「戦争がない」状態だけを作り出すものである。この「～ない」状態を作り出す行為は哲学的に「消極的行為」と呼ばれる。

消極的とは「自分から進んで物事をしない様。引っ込みがちな様。」をいうとあるが、これは総じて「否定的である様」である。「消極的賛成」というのは反対の選択肢がない場合に仕方なく賛成することであり不自由な状態である。「消極的」という概念は結局のところ「とりあえず、一時的に」という意味、根本的、長期的な状態を目指すことではない。

ちなみに、この「消極的概念」は論理学では、ある性質や状態が存在していないことを示す概念、例えば、無知・不幸などと説明されている。つまり、現在の平和条約や安全保障同盟の「消極的平和」というのは平和が訪れるということを信じていないからこそ生まれるという状態かもしれない。

（3）新たな平和の定義「積極的平和」

「消極的平和」があれば「積極的平和」もあるはず。あっ、「積極的平和」といえば、どこかで聞いたような言葉だと思い出される。そう、亡き安倍元総理が唱えた「国家安全保障戦略」での基本理念のことだ。その具体内容は「同盟国である米国を始めとする関係国と連携しながら、地域及び国際社会の平和と安定にこれまで以上に積極的に寄与していく」というもの。言葉では積極的といっているが、意味はまさしく先に定義した「消極的平和」のことではないか。

安部元首相の「積極的平和」は米国の暴力的軍事力による戦争抑止の傘下に入ることによってとりあえず「戦争のない」平和を目指すというまさしく「消極的平和」そのものである。彼は安保法制（戦争法案）を「平和安全法制」と言い換えるように対概念変更の才能が豊かであった。あたかも積極的に平和な世界を作るようなイメージを抱かせる、難なく国民が騙されたというのがこのテクニックである。

実を言うと、この「積極的平和」という概念は世界的に著名な平和学の研究家である、ヨハン・ガルトゥングが提唱した理念である。安倍元首相は知ってか知らずか、この概念を捻じ曲げて使っている。ガルトゥングは「私が考えだした積極的平和の盗用で、本来の意味とは真逆だ」とし、この間違いを非難した。

（4）ガルトゥングの平和学

ヨハン・ガルトゥングは１９３０年生まれのノルウェーの社会学者である。その平和学への功績から「平和学の父」と呼ばれている。旧来の平和概念をより創造的なものへ移行させたからである。従来、平和とは「戦争がない状態」として否定形でしか消極的定義しかできていなかったものに、「平和とはこうであるべき」という「積極的」定義概念を与えたことである。「消極的―積極的」という概念の適応は従来の「戦争がない」状態だけを作り出す「条約」や「同盟」の現状に対して、より創造的な世界の創出を可能にする。さらに彼は平和という人工的で自然状態でないものを維持するのにはどうすれば良いのかを考えた。その方法はやはり概念の分析である。

彼は再び考える、消極的平和「戦争がない状態」が問題ではないのかと。そして「戦争とは何か」を再び掘り下げ深く思考する。戦争の定義は「複数の主権国家が、同一の目標や関心について、互いに正反対であると対立し、暴力によって相手を否定する行為」であった。この戦争の形態「暴力と何か」が根本的な問題ではないかに至る。

（5）暴力とは何か

ガルトゥングの平和学の対象はまず「暴力」から始まる。全ての人間の身体には現実の世界に具体的にはたらきかける能力があり、この能力が他者の意志に対して強制的にくわえられると暴力となる。暴力は殺人、傷害、虐待、破壊などをひきおこすことができる力であり、また、二次的な機能として強制・抵抗・抑止などがある。われわれは日常生活において様々な種類の暴力を経験している。戦争は最大の暴力であるが、そのほか差別やいじめなども精神的暴力があることも知っている。

ガルトゥングはまず目に見える具体的な暴力を「直接暴力」と定義する。直接暴力にさらされる人間は恐怖、抑圧、苦痛を感じ、対抗処置がとられる。多くはさらなる直接暴力になるが、それは「暴力保存の法則」ともいえる憎しみの連鎖によって繰り返される。この「直接暴力」をなくするために人間は知恵を出した。「社会契約論」的な合意、すなわち法律や規制、制度を用いて暴力的闘争に制限をかけたのである。しかし、このような状態は暴力が一時的に姿を変えているにすぎない。本質的な暴力が消滅したわけではない。ガルトゥングは、この暴力は社会の構造のなかに何らかの形で残るのではないかと考え、これを「構造的暴力」と定義した。これは「暴力の制度化」ともいえる。

このような「直接暴力」から「構造的

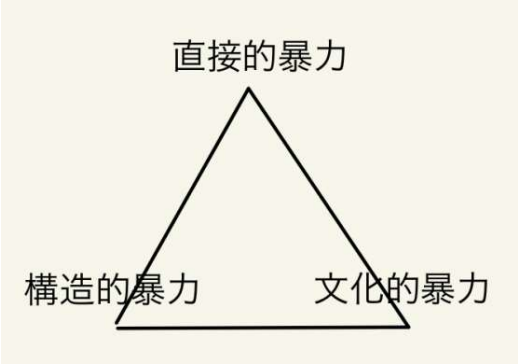
暴力」の移行は歴史的に幾度となく繰り返されているのが現実である。ホップズらが考察した「絶対主義王政」もそうであるし、西欧列強による帝国主義、植民地主義もしかりである。されにマルクスが分析したように資本主義経済ですらそうである。マルクスは封建社会では地主と農奴というような目に見える搾取関係から現代は「資本家―賃労働者」という目に見えない搾取関係へと変化してきていると見抜いた。

（6）暴力の三形態構造

ガルトゥングは暴力を「直接的―間接的」に分類定義したが、このような暴力を正当化しようとする言説もまた暴力であると考えこれを「文化的暴力」と定義した。

宗教やイデオロギー、芸術、科学などの文化の諸側面などあらゆるものが利用されるという。選民思想を正当化するような宗教はむろん、搾取の存在を覆い隠すような経済学など様々である。全体主義や超国家主義、人種優越主義などは常に戦争のイデオロギーであった。政治プロパガンダ、そしてその片棒を担ぐマスコミも仲間に入る。そして現在でも行われている「テロとの戦い」や「ならずもの国家」、「悪を懲らしめる」という戦争を正当化するような風潮も文化的暴力であろう。

ガルトゥングは暴力を支える構造を三項図式的に表現した。頂点に「直接暴力」を置き、左底角にそれを制限し隠ぺいする「構造的暴力」を、右低角にこれらを正当化する「文化的暴力」を配した。このトライアングルによってはじめて暴力の全貌が明らかになったのである。



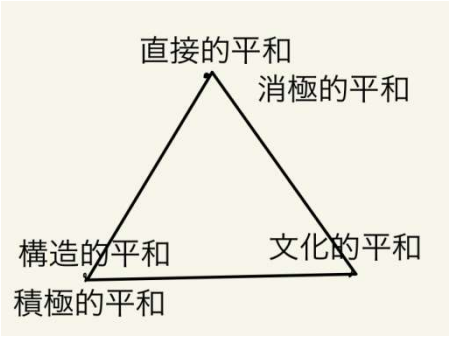
（7）平和創出の三形態構造

戦争、暴力の構造は明らかになったが、では平和は一体どう作り出せばいいのか。ガルトゥングは先の「暴力三形態構造」の反対概念を考察することによって平和の創造構造を明らかにした。

平和の三項図式の頂点には「直接的平和」が置かれる。直接平和とは、直接暴力の不在、低減であり、冒頭で説明した「消極的平和」と同じ概念である。停戦、モラトリアム（執行猶予）などである。古代ギリシャのオリンピックもこのような停戦機能を果たしていたといわれている。しかし、このような直接的平和はそれ自体では脆弱でつかの間の平和で終わる可能性が大きいというのも話した。

そこで二番目、左底角に構造的暴力の不在、低減を目指す「構造的平和」を置く。これは同じく「平和の制度化」とも言えるもので「積極的平和」と読み替えることが可能である。平和憲法、核廃絶など恒久的な暴力不在の構造を創出するものであり、その源泉である格差、差別、抑圧、環境破壊までもすべて人間の対立の原因を構造的になくしていくという根本的な行動のことである。

そして三番目、右低角には「文化的平和」が配置される。文化的平和とは、文化的暴力の不在または低減のことである。それは「平和の文化」とも言い換えられる。その要点は「批判と創造」である。文化的平和はまず文化的暴力を見つけ出しそれを批判する能力を持たなければならない。あらゆる形の暴力を隠ぺいし正当化するイデオロギーは巧妙に仕組まれており、歴史を通じて洗脳化されている。また、日々新たに作られてもいる。さらに重要なのは平和を創造することである。しかし、それは大変困難である、なぜなら冒頭でも話したように平和というものは自然状態ではない、どこかに模範があるものではないからである。それでも平和を目指すのか。そしてその創造の保証はあるのか。ガルトゥングの思想から言うと積極的創造によって平和を普段に構築する状態そのものが平和であるということになろう。



さて、今月は「平和とは何か」を主にガルトゥングの平和学を中心に説明した。考えてみると「戦争論」は巷にあふれているが、「平和学」というものはあまり見られていなかった。この基礎を作ったのがガルトゥングの大きな功績である。すでに高齢であるが、日本へも２０１７年に訪れており講演している。さらに『日本人のための平和論』という著書においては日本が抱える諸問題に具体的な提言を与えている。例えば、尖閣諸島や竹島、北方領土などの領土問題については「共同所有」、そして対米従属からの決別など。しかし、憲法９条問題の解釈については「専守防衛」をめぐって、日本の平和活動家運動との意見の相違もみられる。

ガルトゥングの平和学は実践的指針を

示した優れた学であるが、そこはやはり社会科学である。「積極的平和創造が平和になる」という根拠を示していないからである。これを考えるのが哲学の役割だ。２００年前この問題に取り組んだのがカントの「永遠平和のために」である。機会があれば取り上げたい。

大峯奥駈道（５８）

下村　嘉明

体験型人間学　８

ある現場での出来事である。マンションの大規模修繕工事の仕事は多いが、多くの現場では若い現場監督が不慣れな仕事を懸命にしている。そんな中で意外な監督に会った。多くの現場監督は施工管理士の資格を持った人なのだが、その監督は一級建築士の資格を持っていた。私の経験では初めてのケースだった。

初めて現場に入った時に、他の場所にはなかった雰囲気があった。イラついた緊張感がなくてゆったりとした穏やかな雰囲気を感じたからだ。めずらしいなと思いながら仕事を毎日続けていると、その原因は監督にあると感じた。朝の朝礼でも丁寧な説明があり、個々の作業員にも的確な作業の注意事項が説明される。小さな現場では何も無く儀礼的なものが多い。

監督は、かなりの年齢と思ったので、もしやして私ぐらいかなと思い、二人だけの事務所でそれとなく聞いてみたら、私より一回り若かった。失礼な質問であった。監督の偉い所はいろいろあるのだが、まず一番目は、現場を一日中歩きまわり状況をよく把握している。次は、トイレ掃除を毎日して他人にさせない。第三に、誰に対しても言葉使いが優しくて丁寧である。その他いろいろ優れている点がある。

監督の影響か部下の二人も偉そうにしない。いつも笑っているような威圧感のない若いひとである。監督の影響は、部下のみならず多くの協力会社の作業員たちにも好影響を与えていると思える。和やかな感じが作業員詰所や作業現場で見受けられた。怒鳴り声や大きな声がしない現場はストレスが少ない。

道路工事の現場でも同じような経験がある。応援で行った警備会社の監督が穏やかな人で人間的にも優れているんだと感じた。大きな声を出さず必要な行動で疲れが少なかった。現場は、ほんとうに監督の人間性と経験があれば楽しくやれるが、そうでない場合は、大変疲れるストレスがたまる仕事場になる。たぶん、多くの作業員は、監督の出来不出来を分かっているが、監督を決める立場にはないので、誰が監督であっても従わなければならないからつらい。

たぶんどのような職場でも同じような事が起きていると思う。部下や目下の者に対して上から目線で偉そうに威圧的な上司に巡り合ったらたまらない。もし、上司であるあなたがほんの少しでも周りの人にやさしく穏やかに接したら部下たちは毎日のストレスを減らすことが出来るのだが。

新型コロナウイルス禍愚考（その２５）

明石　幸次郎

新型コロナウイルスの感染力の強いＢＡ.５とかの変異ウイルスが感染者を又増やして、第７波と言われています。

私が関わっているボランティアでも、コロナ感染禍の去年は孤独を訴える人がコロナ以前と比べほゞ倍に増えています。それは、感染予防の為に、人と会うのを制限したり、仕事はテレワークが増えたり、コロナの影響で仕事が無くなる、又、人との接触を出来るだけ避けるような雰囲気があるためか、外出する機会も減っていることで、人との繋がりが少なくなり孤独感を感じることに原因があります。社会全体に何となく閉塞感が強く漂っていて、コロナ以前でも孤独感を抱いていた人がより以上に孤独感を抱き、誰かと話して自分の孤独でしんどい苦しい気持ちを受け止めて欲しいと電話を掛けてこられます。

その中には、孤独で精神的、経済的にしんどい、こんな何も良いことがない社会で生きて行く意味が感じられないので、死にたいと訴える人もいます。その訴えをどう受け止めて、その苦しい気持ちを充分に話してもらい、掛け手が自分の気持ちを吐き出して少しは気持ちが軽くなり、死にたい気持ちを思い直し、もう少し生きてみようかという気持ちになってもらえれば、苦しい気持ちを聞かせて貰ってよかったと思いますが、中々、そうなるようなケースの電話は少ないです。

死にたいと訴えて電話を掛けてくる人に対して、１回の電話で、その死にたい気持ちを変えて、生きて行こうという気持になってもらうのは、本当に難しいことです。

「死にたい」とは異常な現実に対する正常な反応であると、心理学者は言ってます。この「死にたい」の前段階で、「消えたいとか、いなくなりたい」のような言葉が出てくる人は、幼いころに親、兄

弟からDVを受けたり、学校でのいじめ、厳しい叱責などを受けたことで否定的な自己イメージが定着してしまっています。中々、自己肯定感が持てなくなっています。

そんな苦しく死にたいと言う人に自分の倫理観（生を受けた人が、自ら生を断つことは許されないとか）道徳感（周りを悲しめる、迷惑をかけるとか）を持って説得することは、かえって逆効果と言われます。苦しむ当事者に対して必要なのは、正論や説得ではない「死にたい」という気持ちを否定せずに、その苦しめている背景、深層にあるものを具体的に聞いて、それを共有する。同時に原因にじっくり耳を傾け、共感し寄り添うことで相手は心を開こうと思える。

これが、出来るのは、精神科医のカウンセリングなどでしか出来ないようにおもえるが、カウンセリングを受けようとすると本人の意志と何よりもお金が要ります。精神科医も話を聞くだけでは商売にならないので、精神安定剤などの薬を処方して対症療法的な治療をするのが一般的なようです。そうでない、患者に寄り添った治療を根気強くする赤ひげ先生的な精神科医もおられますが。お金のないカウンセリングも受けられない人は、私らのような何も心理学の資格のない、善意だけでやっているボランティアに苦しみを訴えてきます。このしんどい、苦しい人に対して言えることは、あなたのしんどい話に寄り添って真剣に聞き、あなたは一人ではない、気に掛けていますよ、又、しんどくなったら、電話をして来て下さいよと言うだけです。なぁ何と、しんどい話を聞くだけの、自己満足的な行為をして、しんどくなっている自分を自慰?して、本当に何か苦しい人の役に立っているのかと自問している自分がいます。

オクラの山たより（72）

困了生

一

「みじか夜（短夜）」という季語があります。手元の歳時記の説明には「夏至になるともっとも夜は短く、昼は長い。その天文気象上の理屈ではなく、まだ眠り足りぬうちにすっかり明けきってしまう短くはかない夜の感じをいう」とあり、これに続けて例句として竹下しづの女（1887―1951）の次の句があげられています。一九二〇（大正九）年の作です。

① 短夜や乳（ち）ぜり泣く児（こ）を須可捨焉乎（すてっちまをか）

漢文では「須可捨焉乎」は訓読では「すべからく捨つるべけんや」と読むのですが、それを「すてちまをか」と読ませる表記の異様さがまず目を引きます。「夏の短い夜の間も乳を求めて泣き出して寝させてはくれない乳児。もう捨ててしまおうかという切なさを表現した句である」と歳時記の編者は解説しますが、これには少しく異論があるので横道へ大きくそれるのを承知で一言しておきます。

竹下しづの女は俳句愛好者にはよく知られた俳人です。本名は竹下静廼（しずの）。福岡県に生まれ教職・図書館司書の仕事をこなしつつ二男三女を育てる一方で句作をしていきました。理性的ともいえる手法で、女性の自我や自立を詠った作品が多いと評価されていて①の句は彼女の代表作であり、「ホトトギス」同人で杉田久女・長谷川かな女とともに、大正期の女流黄金時代をつくった女性です。

①の句は職業を持った女性、しかも子育てをしている女性が句作りをしようとすることがどのようなことであったのかをよく示す句です。

現代でも仕事をもつ母親が「自分は母親失格ではないか」「自分は結局子育てが好きになれないのではないか」という声はよく聞きます。この句への作者自身の自解に「現今の過渡期に半ば自覚し、半ば旧習慣に捕らえられて精神的にも肉体的にも物質的にも非常なる困惑を感ぜしめられている中流の婦人の或る瞬間の叫び（心の）」とありますが、この言葉を読むとこの百年の間わが国の歴史の進展は何であったかと考え込みます。

①の句の「須可捨焉乎（すてっちまをか）」のインパクトの強さにはしづの女の強い意思表示、つまり、漢文はもちろん俳句も当時は男中心のものでしたが「女性である自分も男中心社会に負けずやってやるんだから」という気迫を感じるのです。この気迫と一脈通ずる句に次の句があります。

② 汗臭き鈍（のろ）の男の群に伍す

たぶん「鈍」は作者自身を指します。「鈍」といわれようと何といわれようとも、とにかく額に汗して働く男たちに自分も汗にまみれつつ働いていくのだという決意を示した句で同時代の他の女性がつくった俳句にはない句風です。たとえば次の句もそうです。

・短夜や　乳足らぬ児の　かたくなに
・鮨おすや　貧窮問答　口ずさみ
・ことごく夫（つま）の遺筆や種子袋
・ペンだこに手袋かぶせてさりげなく
・苺ジャム　つぶす過程に　蟻つぶす

竹下しづの女は晩年、中村草田男とともに後進の指導にあたり金子兜太らの俳

人を育てたことも記憶しておいていいことです。

二

それはともかくも本題から少しはずれたので大急ぎで元にもどすと、季語の「みじか夜」は竹下しづの女にとっては乳を欲しがる乳児が泣いてなかなか寝付かれず気づけば朝になった夏の短い夜という意味であり、それ以上の意味は彼女の「みじか夜」には含まれていません。

しかし、この「みじか夜」という季語に独自といってもいい意味を加え自作の句に多用した俳人は蕪村でした。岩波文庫「蕪村俳句集」（尾形仂校注 1989年刊）には一〇五五句が収められていますが、そのうち十九句に「みじか夜」が使われています。そのうちの何句かを示します。

② みじか夜や浪うちぎはの
　捨篝（すてかがり）
③ みじか夜や芦間流るる蟹の泡
④ みじか夜や毛むしの上に露の玉
⑤ みじか夜や枕にちかき銀屏風
⑥ みじか夜や同心衆の河手水（かわちょうず）

どの句もそれぞれ蕪村らしい発見があっておもしろく、そして何より美しい。

蕪村は「遅き日のつもりて遠きむかしかな」といった春の句に秀句が多いという印象がありますが、こうして②から⑥の句を見ると夏の短夜の詩人、夏の夜明けのさわやかさの感覚を表現した俳人ともいえそうです。

もっとも「みじか夜」は蕪村の専売特許ではありません。すでに古代の「万葉集」にその使用例があります。

A　ほととぎす 来鳴く五月の 短夜も
　独りし寝れば 明かしかねつも
（巻十　一九八一）

誰もがとうに知っているように初夏の夜の短さは本当に短い。そんな短い夜も貴方がいなくては寂しくて一夜を明かすことはとてもできない、という泣き言めいた歌です。ここでは求愛の強さを示すものとして「みじか夜」が使われています。次の歌では「みじか夜」ではなく「暁（あかとき）」と言葉は違っていますが、美しい夜明けの風景を詠んだ歌として秀逸です。

B　暁（あかとき）と 夜烏鳴けど
　この山上（おか）の
　木末（こぬれ）の上は
　いまだ静けし
（巻七　一二六三）

季節をはっきりと言っていませんが、朝もやの上に白む空に丘の木立の細い枝先がひっそりとにじむ。そんな風景は初夏の早朝のように思えます。その木立のたたずまいがあんなに静かなのだからまだ朝ではない、夜なのよと女性が恋人を引きとめている情景を描きながら夜の中にゆっくりと朝が入りこんでくる溶明（fade in）の一瞬をとらえた歌です。

早すぎる夜明けの到来と恋人との別れの嘆きとの結びつきは「万葉集」の頃からすでにあった表現のようです。平安時代になると夏の夜は「短い」を中心概念にしてとらえるのが一般化しました。短くとも恋人を思う身には長すぎるとか、短い逢瀬のあとの別れの哀感を強調する格好の材料とするとか、「万葉集」以来の継承ではありますが、それがいっそう明確な輪郭を持った季節美の表現の一類型として定着してきます。

たとえば「春はあけぼの……夏は夜……」と書いた清少納言です。

彼女は「枕草子」の七十三段（岩波文庫による章段）で次のように書いています。

しのびたる所にありては、夏こそをかしけれ。いみじくみじかき夜の明けぬるに、つゆ寝ずなりぬ。やがてよろづの所開けながらあれば、涼しく見え渡される。なほ今少し言ふべきことのあれば、かたみに答（いら）へなどする程に、ただゐたる上より、烏の高く鳴きていくこそ、顕証（けしょう）なる心地してをかしけれ。

夏の一夜を清少納言とともに過ごしたのは誰か。無粋な問いですが若いころに結婚した橘則光か、それとも則光と離婚した後に噂があり歌人としても有名であった藤原実方か。はたまたまったくの架空か。いろいろと想像はできますが、それはともかく恋人と過ごした夏の夜が明けたときの様子がおもしろいです。

「顕証なる」とは「丸見えだ」の意味です。夏の早朝、戸をすべて開け放つと涼やかな風景が見えます。いい気分になってまだ語り足りないことを恋人と話し合っているとちょうど自分たちの真上でカラスが甲高い声で鳴いて飛び去っていきました。「あら、私たち丸見えじゃないの」という驚きとおかしさ。

清少納言が「ああ、恥ずかしい」と思ったかどうかは分かりませんが、人目を忍ぶ逢い引きのあとの夏の明け方、夜の闇の中に徐々に涼しさをともないながらにじんでくる光の中に一夜の情事の疲れからか少し呆然としながらも別れを惜しむ男女二人。美しい情景です。夏の早朝の清爽感がただよっています。

それに対して「古今集」の歌人たちは、夏の夜の短さをおかしがるような詠みぶりをしています。清原深養父は清少納言の曾祖父ですが百人一首にもおさめられた次の歌を残しています。

C　夏の夜は　まだ宵ながら
　明けぬるを　雲のいづこに
　　月やどるらむ
　　清原深養父

短い夜への愛惜の情と月への関心が若干の諧謔をもって詠まれていて同じ作者による「冬ながら空より花の散り来るは雲のあなたは春にやあるらむ」の歌と共通した詠みぶりが感じられます。

三

さて、「みじか夜」という語の古代での使われようを駆け足で見てきましたが、近世の俳人はこの「みじか夜」に新しい何を付け加えたのでしょうか。残念ながら芭蕉には

手を打てば木魂（こだま）に明る夏の月
夏の夜や木魂に明る下駄の音
　　元禄四年の作

といった句はありますが「みじか夜」を使った句は岩波文庫「芭蕉俳句集」（中村俊定校注　1970年刊）には次の一句がみえるだけです。一六八八（元禄元）年、芭蕉四十五歳の作。

　元禄元歳戊辰六月五日會
ひるがほの　短夜ねぶる　昼間かな

こんな句を芭蕉も作るんだと言いたくもなる作品ですが、「みじか夜」を使った句は他には見当たりません。となれば、この「みじか夜」という季語を一挙に奥行き深くした俳人は蕪村であるといってもいいのではないでしょうか。当然、そういった点に蕪村の詩的な想像力の一つの特性を見ることができます。それを②から⑥の句で見ていこうと思います。

古代の王朝風の匂いをただよわせている句。それはまず⑤の句でしょう。

⑤　みじか夜や　枕にちかき　銀屏風

「枕」の語が一夜を過ごした恋人の別れの朝の悲哀の雰囲気を漂わせます。「銀屏風」は地紙の全部に銀箔を置いた屏風のことです。

言うまでもなくこの句の眼目は「銀屏風」の銀の涼しげな微光の発見にあります。谷崎潤一郎に有名な「陰影礼賛」という著作があります。この本の中で谷崎は古い家の奥で遠くにある庭の光をとらえて「ぼうっと夢のように照り返している」金襖や金屏風の沈痛な底光りの美しさを讃えています。しかし、蕪村が⑤の句でとらえているのはそれよりはるかにかすかで繊細な光の反射です。夜の闇の中に早くもきざした朝の光を、敏感に映して室内の薄暗がりの中に冷ややかに浮かび上がっている銀屏風。銀色の底に夜を含んだまま夢の続きのように鈍く冷ややかに銀屏風が反射してみせる微かな光。そして、それは外の世界には徐々に朝が近づいていることをも想像させます。これこそが蕪村の発見した「みじか夜」の美しさでした。芭蕉が詠んだ

　金屏の　松の古さよ　冬ごもり

とは対称的といえます。金屏風と銀屏風。描かれた松の重厚な輝きと銀屏風に光があたって発する微光。そして、冬ごもりの安定感とはかなく明ける短夜の不安定さ。多くの人が指摘するように好一対といえます。

⑤の句と同じく王朝の雰囲気を残した句としては③の句があります。

③　みじか夜や芦間流るる蟹の泡

百人一首を覚えている人なら「難波潟みじかき芦の間もあはでこの世をすぐしてよとや」という伊勢の歌をすぐに思い浮かべたことでしょう。蕪村もこの歌を念頭において句作をしたのは明かで「あはでこの世を」を「蟹の泡」としたところなどはパロディ化したといってもいいくらいです。ただ蕪村は「蟹の泡」に俳諧的なユーモアを漂わせながら句全体ではすがすがしい夏の早暁の水辺の風景を描ききっています。「みじか夜」で白々と明けていく暁の空を描き「芦間流るる」で薄明の中で芦の群生の間をわずかに光ながら流れる水を描いています。そして下五「蟹の泡」でまだ目ざめない眠りのつぶやきのように浮かんでは消えてゆく泡（あぶく）に焦点が絞られます。夢と現実（うつつ）の境界を蟹の泡らしきものがプクプクと流れ去っていく。夜明けのぼんやりとした光の中で見出されたどこまでも広がっていく空間。これも蕪村によって発見された「みじか夜」の美しさです。

もちろん蕪村らしい絵画性に富んだ句もあります。それが③の句です。

④　みじか夜や毛むしの上に露の玉

短夜の明けていく空をバックにして近景の毛虫、それも毛虫の毛の先についた露をクローズアップした句です。きらりと光る涼しげな露の玉。それに視覚を集中することでかえって背景の空はひろびろとした空間にイメージされます。

この三句をみれば古典的な世界の「みじか夜」と蕪村との隔たりはすでに明らかであろう。蕪村には「ほとぎす」も恋人との別れの朝の情緒も、さらには夏の夜が短すぎることさえも関わりがありません。蕪村が心ひかれているものは短い夜にそっと染みこんでくる薄明の光の不思議さ、中間的で縹渺として不確かなものがもつ魅力であろうと考えられます。銀屏風に反映する微光、薄明の中の水の

流れ。微少なものに射している暁の光にひかれる蕪村。そして、蕪村の心はさらにその光の背後に暗示される広大な空間と生のすがたにひかれているのです。

四

暁のかすかな光に魅力を感じ、その背後にある広大なものに心ひかれる蕪村。ここまでくれば次の二句もその流れにあると理解できるでしょう。

② みじか夜や浪うちぎはの
　　捨篝（すてかがり）

⑥ みじか夜や同心衆の河手水

②の句にある「捨篝」は昔の戦陣で陣所と離れたところに番人も置かずに焚いたかがり火のことです。句意は短い夜も明け、いくさも終わって不要になり浪うちぎわに捨てられたかがり火、です。夜明けの色をいち早く受けて白々と光をおびた波頭がによって想像される浜辺の早朝の広がり。いくさ終わって浜辺に捨てられた捨篝がまだ白い頼りなげな煙をあげている。この捨篝にあたる光とそこからたちのぼる煙を焦点として空と海との広大な空間、そして愚行をくり返す人間の歴史的な空間が心に広がっていきます。

⑦の句は大きな捕物のあとでしょうか。短夜と短期で事件が一段落したことを重ねています。事件も解決し明け方の光の中で川の水で手足を洗って気分もさっぱりしている同心衆の情景です。さわやかな夏の朝にまで至る一夜の経緯を想像させる一句です。もちろん、②の句に比べれば京の朝の風景の一コマで少しスケールは小さくなりますが、「みじか夜」のうっすらとした光が、その背後にあるものを想像させていくことでは同じです。

背後にあるもの、それは淡くかすかであるが、それゆえにこそ我々の生の本質に近づきうるものを表現しようとしたのではないか、とは勝手ながら私の想像です。もう少し言葉をつげば、夜の闇と朝の光の境、静と動、眠りと目ざめ、夢とうつつ、死の感覚と生の感覚がわずかに移ろいながら交差する時間、未分のままやがて溶明していくわずかな時間です。蕪村の再発見した「みじか夜」は彼に重大な句のテーマをもたらした、と私は想像を重ねるのです。

面白いのは早暁の魅力に一九世紀後半の欧米の文学者も気づいていることです。フランスの近代の詩人ランボーは友人への書簡で次のように書いています。

（パリの夏の朝三時、徹夜のロウソクの明りが白むと仕事をやめて）朝の最初の、このえもいわれぬ一刻にとらえられている木々を、空を見つめる。

「えもいわれぬ一刻」の空を見つめる詩人の心はどんなものなのか想像するのは楽しいことです。

また、とある山間の停車駅の明け方、車窓から「朝焼けを映して空よりも美しいバラ色に染まった」牛乳売りの娘の顔を見て、生への欲求と幸福感が蘇ってくることを感じた、と自らの小説の中に書いたのは二十世紀初めに活躍したフランスの作家マルセル・プルーストです。

ランボー、プルースト、いずれも夏の夜明けの不思議な美しさに魅入られていたのだ、と私には感じられます。では、この二人と蕪村はどこが違うのか。繰り返しになりますが、蕪村は彼らと共通した感覚を持っていました。しかし、その一方で、輝きを増す光ではなく消えゆく闇の方を、覚醒ではなく夢の方を、生ではなく死の方を蕪村は見ようとしていたのではないか。つまり、より「不確かな」ものの美を見つめようとしていたのではないか。そんな気がしてくるのです。それは中世以来の無常観が彼の心に深く根付いていたのかも知れません。さすがに近代の俳人である竹下しづの女の句にはその痕跡はありませんが。

隠された歴史（４７）

満田　正賢

前回は、蘇我入鹿が暗殺され蘇我本宗家が滅亡した乙巳（いっし）の変は九州王朝による蘇我本宗家からの権力奪還の戦いだったという仮説をご紹介しました。今回は、その中で重要な役割を担ったと思われる近江の豪族「息長（おきなが）氏」に焦点を当てたいと思います。

前回、息長氏に関しては次のような考察を行なっています。

「孝徳や中大兄は、『蘇我王国論』の著者山崎仁礼男氏が考察した架空の天皇系図につながっていますが、その出発点は、敏達の架空の皇后として記された『広姫皇后』であり、その父親は息長真手王です。息長氏は近江の有力豪族であり、神功皇后（息長足姫＝おきながたらしひめ）を輩出した氏族とされ、又その中興の祖は仁徳天皇の皇子若野毛二俣（わかぬけのふたまた）王の子・意富富杼（おほほと）王だとされます。日本書紀の注釈書である釈日本紀（しゃくにほんぎ）が取上げた上宮記逸文では、継体天皇はこの意富富杼王の孫とされています。なお、本朝皇胤紹運録（ほんちょうこういんじょうんろく）もこの系図を載せています。允恭天皇の皇后で安康、雄略両天皇の実母である忍坂大中姫（おしさかのおおなかつひめ）は、意富富杼王の同母妹となります。この系図の真偽は別にしても、後期九州王

朝（筑紫天皇家）を作り出した継体―安閑―宣化の系統は、大和の豪族にとっては外様であったことは間違いありません。一方、蘇我馬子は、推古天皇に対し大和の有力氏族であった葛城氏の支配地を自分の本拠であると言っていることから、大和の豪族の中心的存在であったと思われます。後期九州王朝（筑紫天皇家）と孝徳・中大兄等が、近江に拠点を置く息長氏を通じてつながっていた可能性があるのではないでしょうか。」

皇后ではなかったにせよ息長真手王が娘を欽明の妃に送り込んでいますので、息長系氏族が欽明王朝に影響力をもつ氏族であったことはまちがいありません。そして息長系氏族は、乙巳の変、白村江の敗戦、壬申の乱という古代における三つの重大事件を経た後の天武朝においても、強大な勢力を保っています。

天武天皇は「八色の姓（やくさのかばね）」という新しい「姓（かばね）」を各氏族に与えています。八色の姓とは、「眞人（まひと）、「朝臣（あそみ・あそん）」、「宿禰（すくね）」、「忌寸（いみき）、「導師（みちのし）」、「臣（おみ）」、「連（むらじ）」「稲置（いなき）」です。天武十三年（六八四）には、臣下の最高位である「眞人」姓を十三の氏族に授けました。守山公（きみ）・路公・高橋公・三国公・当麻公・茨城公・丹比公・猪名公・坂田公・息長公・羽田公・酒人公・山道公です。一方古事記（応神記）に記された意富富杼王の子孫は三國君、波多君、息長坂君、酒人君、山道君、筑紫之末多君、布勢君等となっています。意富富杼王は息長氏の中興の祖とされていることから、この七氏は息長系氏族と見做すことができます。この中で眞人が授けられたのは、三國君、波多君、息長（坂）君、酒人公、山道公の五氏です。眞人十三氏族のうち五氏が息長系氏族で占められています。このことは、息長系氏族が天武朝において強大な影響力を持っていたことの証拠となると思います。なお私は、眞人とならなかった息長系氏族二氏のうち「筑紫之末多君」については、宣化天皇の嫡子とともに筑紫に移った氏族、または後期九州王朝そのものが隠蔽されたものではないかと考えています。

話は変わって、私は古事記と日本書紀の神武記（紀）以降の「各氏族の祖」の記述を比較しました。当初、古事記と日本書紀の推古期以前の「各氏族の祖」の記述は殆ど同じものであろうと想像していたのですが、比較の結果、両者には大きな差があり、古事記、日本書紀それぞれに特徴があることが分りました。その特徴は細かくは色々ありますが、特に古事記に記されており日本書紀には記されていない氏族と祖の記述に注目すると次の二点の特徴が浮かび上がってきました。

第一の特徴は、古事記には開化記に開化天皇の孫の「息長宿禰」とその子「息長帯比賣（神功皇后）」、「息長日子王」という「息長」という人物の記述があることです。古事記の原文は次の通りです。

若倭根子日子大毘毘命（開化天皇）（中略）又娶其母弟・袁祁都比賣命、生子、山代之大筒木眞若王、次比古意須王、次伊理泥王。三柱。

（中略）

次山代之大筒木眞若王、娶丹波之遠津臣之女・名高材比賣、生子、息長宿禰王。此王、娶葛城之高額比賣、生子、息長帯比賣命、次虚空津比賣命、次息長日子王。三柱。

これに類した記述は日本書紀にはありません。

又、古事記の応神記にある意富富杼王の子孫の記述の原文は次の通りです。

品陀和氣命（応神天皇）、（中略）又娶咋俣長日子王之女・息長眞若中比賣、

生御子、若沼毛二俣王。一柱。

（中略）

又此品陀天皇之御子、若野毛二俣王、娶其母弟・百師木伊呂辨・亦名弟日賣眞若比賣命、生子、大郎子・亦名意富富杼王、次忍坂之大中津比賣命、次田井之中比賣、次田宮之中比賣、次藤原之琴節郎女、次取上賣王、次沙禰王。七王。故、意富富杼王者、三國君、波多君、息長坂君、酒人君、山道君、筑紫之末多君、布勢君等之祖也。

この記述も日本書紀には現れません。古事記が息長系豪族の祖先を美化して記していることは明白だと思われます。

第二の特徴は、建内（武内）宿禰に関する記述です。建内宿禰は景行・成務・仲哀・応神・仁徳の五代にわたって天皇に仕え、三百年生きたとされる伝説の人物です。特に神功皇后が九州から麑坂（かごさか）王・忍熊（おしくま）王など大和の勢力の妨害を退けて幼い応神天皇と共に大和に入る際に神功皇后を支えた重臣として記されています。

私は、「隠された歴史（１６）」などで、神功・応神伝説は宣化天皇の嫡子が筑紫に遷都した際に筑紫の人達を支配するためのイデオロギーとして創作されたと考えました。神功伝説自体は九州で活躍していた女性の物語など複数の人物の物語を組み合わせて作られたものだと思われますが、最大のモチーフは、息長氏が輩出した神功皇后が幼い応神天皇を連れて大和の勢力を打ち負かし、幼い応神天皇が近畿王朝の天皇として即位したことにあります。三韓征伐譚を含め筑紫で活躍した後に近畿王朝の王となった神功・応神伝説は、応神天皇の五世孫である継体天皇の子孫が筑紫を支配する正統性を与えています。その時に神功皇后を支えた建内宿禰は継体天皇の後を引き継ぐ後期九州王朝（筑紫天皇家）にとっては過去における偉大な臣下ということになります。

古事記（孝元記）にある建内宿禰の子孫の記述、すなわち建内宿禰は孝元天皇の孫であり、建内宿禰の子が蘇賀石河宿禰でその子孫が蘇我臣を筆頭とする各氏族であるという記述、は日本書紀にはありません。古事記のこの記述はあきらかに、蘇我氏が皇孫であり、応神天皇を支えた偉大な臣下である建内宿禰の子孫であることを誇示しています。

古事記の原文は次の通りです。

大倭根子日子國玖琉命（孝元天皇）

（中略）又娶内色許男命之女・伊賀迦色許賣命、生御子、比古布都押之信命。（中略）比古布都押之信命（中略）又娶木國造之祖宇豆比古之妹・山下影日賣、生子、建内宿禰。

（中略）

此建内宿禰之子、幷九。男七、女二。波多八代宿禰者、波多臣、林臣、波美臣、星川臣、淡海臣、長谷部君之祖也。次許勢小柄宿禰者、許勢臣、雀部臣、輕部臣之祖也。次蘇賀石河宿禰者、蘇我臣、川邊臣、田中臣、高向臣、小治田臣、櫻井臣、岸田臣等之祖也。次平群都久宿禰者、平群臣、佐和良臣、馬御樹連等祖也。次木角宿禰者、木臣、都奴臣、坂本臣之祖。次久米能摩伊刀比賣、次怒能伊呂比賣、次葛城長江曾都毘古者、玉手臣、的臣、生江臣、阿藝那臣等之祖也。又若子宿禰、江野財臣之祖。

日本書紀には建内宿禰の子孫に関する記述はありません。その代わり、孝元紀に武内宿禰の祖父（孝元の皇子・彦太忍信尊）、景行紀に武内宿禰の父（景行の皇子？・屋主忍男武雄心命）が記されています。日本書紀の原文は次の通りです。

大日本根子彦國牽天皇（孝元天皇）

（中略）妃伊香色謎命、生彦太忍信命。（中略）彦太忍信命、是武内宿禰之祖父也。

大足彦忍代別天皇（景行天皇）（中略）三年春二月庚寅朔、卜幸于紀伊國將祭祀群神祇、而不吉、乃車駕止之。遣屋主忍男武雄心命一云武猪心、令祭。爰屋主忍男武雄心命、詣之居于阿備柏原而祭祀神祇、仍住九年、則娶紀直遠祖菟道彦之女影媛、生武内宿禰。

古事記では建内宿禰は孝元天皇の孫ですが、日本書紀の武内宿禰は孝元天皇の曾孫になっています。私は、建内宿禰は実在の人物ではありますが、現代における歌舞伎役者の名跡のように、何代かにわたって同じ名前を踏襲した複数の人物の名前ではないかと考えています。そうであれば、古事記と日本書紀の記述の矛盾は解消します。

「隠された歴史（1）」では、古事記は蘇我馬子が編纂した天皇記・国記を天武が都合の悪い部分を伏せて稗田阿礼に口述したものであると考察しました。古事記に蘇我氏が皇孫であり、神功・応神朝を支えた建内宿禰の直系氏族として、美化されていることはその仮説と合致します。

息長系氏族については、蘇我馬子の時代においても天武期においても大きな影響力をもつ存在であったことが、古事記の記述と天武朝の「八色の姓」によって推定出来ます。乙巳の変に於いて孝徳・中大兄に従った近江の息長系氏族が、同じ息長氏の系統から生まれた後期九州王朝（筑紫天皇家）と協力して蘇我本宗家（蘇我入鹿）を滅ぼしたという仮説の時代的背景が垣間見えるのではないでしょうか。なお、日本書紀編纂時の近畿王朝の中では、息長系氏族影響力は相対的に低下していたものと思われます。

秋篠寺　技芸天像の図

プロパガンダに騙されるな
―学び直そう戦争と憲法の歴史（一六）

成瀬　和之

明治政府の初めての朝鮮への武力攻撃は、一八七五年（明治八年）九月の江華島事件でした。この時すでに政府の公式報告は書き換えられていたのです。「第一ボタン」です。

江華島事件は、首都ソウルに近い江華島に日本の軍艦「雲揚（うんよう）」が接近、砲台と交戦、そしていま仁川空港のある永宗島の砲台を占領、破壊し、大砲を奪ってきた事件です。軍艦「雲揚」の艦長は海軍少佐井上良馨（よしか）でした。

この江華島事件については、井上良馨の戦闘報告といって良い詳細な報告書が防衛研究所の図書館にあります。この報告書が二つあるのです。「明治八年九月二九日付け江華島事件報告書」（「九・二九報告書」とします）、そして「明治八年一〇月八日付け江華島事件報告書」（「一〇・八報告書」とします）。

江華島事件は、日本では「飲料水をもとめていたところを砲撃された」とながく言われてきました。

ところが、「九・二九報告書」では、戦闘は三日にわたっておこなわれ、江華島だけではなく永宗島の砲台を占領し大砲などを分捕ってきたことがつぶさに書かれています。そして「飲み水」に関して

は、戦闘の後、九月二三日、長崎に向かって帰港する日の朝、「午前飲み水を積み、……」と一カ所の記載があるだけです。

書き換えられた「一〇・八報告書」では、最初から最後まで、飲み水を求めていたことが一貫して主張されていて、それがあたかも江華島事件の原因であるかのように書かれています。

また、「九・二九報告書」では、戦闘は三日にわたっていたことが詳細に書かれていたのに、「一〇・八報告書」では、戦闘は一日のことになっているのです。

「九・二九報告書」は戦闘詳報と言ってよく三一〇〇字余りの長さでしたが、「一〇・八報告書」は一五〇〇字と字数も約半分にされました。

この「一〇・八報告書」は、井上艦長を含め海軍の中枢部を中心に作成され、大臣参議一同の承認を得て江華島事件の「公式報告書」としたものです。

このように、江華島事件の日本政府の公式報告書は、「九・二九報告書」から「一〇・八報告書」へと大きく書きかえられました。「書きかえる」といっても、ただ要約するだけの書きかえではありません。あった事実を隠し、最初から「飲み水」を求めていただけなのに、朝鮮側が不法に攻撃してきたのでやむを得ず反撃したかのようにフィクションを加えて書きかえたのです。こういう書きかえを「改竄（かいざん）」と言います。単なる書きかえではありません。

この江華島事件の報告書の「改竄」が「第一ボタン」となって、「明治という時代の日本において、これからたびたび明治時代の権力者たちは「改竄」を繰り返していくことになりました。対外戦争での「大日本帝国」軍隊の行動を記述するのに用いられた「改竄」の手法第一号が江華島事件の報告書だったのです。詳しくは、『日本人の明治観をただす』（中塚明著、高文研、二〇一九年）を参照してください。

日本の近代史のはじめから、明治もまだ八年という時期から、日本の朝鮮に対する武力行使が始まり、その時から、日本の不当な侵略の行為を隠蔽することと、他方、「国際法もわきまえない遅れた朝鮮」ということをことさらに強調し、「朝鮮の後進性を言い立てることで日本の侵略の事実を覆い隠す」という、内外の世論を欺く操作が、この江華島事件から始まっていたのです。これは二一世紀の現在でも、この日本で続いています。前回触れましたが、安倍政権の下で二〇一六年から次々に判明した自衛隊日報隠蔽問題の連鎖は、その一例です。

日本近代史における朝鮮侵略の第一歩から日本の軍事行動がウソの話に改竄されていた事実を、私たちは忘れないようにしましょう。「戦争プロパガンダ」に騙されないために。

俳句

土田　裕

初秋や目礼交はす竹箒
新涼や主に目を遣る盲導犬
隣国は近くて遠し天の川
立ち止まりマスク外せば風は秋
ことごとく中洲の消えて台風来

影山　武司

夏薊火口を巡る細き径
道祖神の石の丸みや苔の花
藻の花や揺れつ流るる笹の舟
笹舟を噛して子らの夏休み
車座に氷菓舐め合ふ草野球
夏蝶の影戯るる銀沙灘
鎮魂の合唱空へ夾竹桃
誓ひ述ぶる子の名は「鈴」と平和祭
蛇口より水の訥々原爆忌
富士仰ぐ息の整ふ今朝の秋

編集後記

SK生

▼安倍元総理の国葬をめぐって国論は二分されている。国葬実施決定まで経緯への懐疑、経費の大きな負担への不満、国民に向けきちんと説明するといった国会での首相の説明の無内容さ。国葬をめぐる議論はどこに落ち着くのか。今のところ行き先不明である。おまけに元首相の国葬の一週間ほど前には先日亡くなった英国女王の国葬が英国で行われる。この二つの国葬を世界の人がどう見るか。ジャーナリストならずとも気になる。▼福沢諭吉は政治とは「悪さ加減の選択」と看破した。だからこそ物事の裏と表、対立する意見のそれぞれの良い点と悪い点をしっかりと「両目を開けて」見ていく両眼主義という認識態度が大事だと「文明論之概略」（明治八年刊）で強く述べている。我らが首相も「人の話をよく聞く」ことが自分の美点であるといって登場した。ただ福沢の言う両眼主義を彼がどれほど体得しているかどうかはやや不安になってきた。政治家は「結果責任」が問われる。この言葉が強く首相の心を圧迫しているのではないかと、余所ながら心配する。▼先日、若い人がネット上でウクライナでの戦争に関わって「戦争を始めた人が飼っている　俺の故郷の美しい犬」という短歌を発表していた。プーチン大統領は愛犬家。東日本大震災でロシアが支援をしてくれた返礼として日本から秋田犬が贈られロシア側ではこの犬に日本語で「ゆめ」と名づけた。この「ゆめ」とプーチン氏が戯れる姿は何度もメデイアに登場している。短歌はそのことを詠っているのだ。「戦争を始める人って、きっと自分と同じく犬を愛する優しい心の持ち主でもあるんだ」という戸惑いと驚き。暗いニュースの多い中で若い人の心に健全でナイーブな精神が存在することにホッとする。

連載 ふみの道草（51）　山椒魚

少年の夢草原を駆けて行く

表題は、二〇二二年五月、大分県番傘川柳連合会の機関誌「高崎山」が毎月実施している「課題吟誌上句会」で課題「草」の特選に選ばれた句である。選者評に、「特選の句は一読明快、未来に生きる少年の幸せな誇り人生を祈りたいと思う」とある。作者名はとくに記さないが、戦後に生まれ高度経済成長の時期に少年期を過ごした方である。その時代の少年は、すべてとは言わないが、星を見上げることはあっても月に吠えたりはせず、希望に胸を膨らませていたのだろう。だからこそ、六十を越えてもこのように少年の夢をうたうことができるのだ。

同じように、戦後の少年を詠んだこんな句がある。

太陽に向かって歩く子に育て
糸切って凧　少年の使者になる

早川双馬、平賀胤寿の句である。一茶にもこんな俳句があるとのこと。

凧抱いたなりですやすや寝たり
けり

遠い昔から、少年は風の子だったのだ。風の吹くまま大空を飛び、あの山を越えてどこまでも飛んでゆきたい。少年は明日を夢見ていた。少年には無限の可能性がある。少年も、世の中もそう思っていただろう。

少年をうたう句が変化したのは、いつからだろうか。一九六三年一月号から一九八一年八月号までの「川柳番傘」誌上に掲載された句の中から編纂された「一万句集」の中に、「少年」の項に分類された句が二十二句収録されている。作者名は伏せて書き出して見よう。

少年の夢は巣箱に置いてある
しゃべらない日の少年が恐ろしい
少年A世間に詫びる母があり
少年Aの疵あと癒えている背広
少年がスプーンを投げる小宇宙
今も昔も少年というわからず屋
父をどうとらえているか
ハイティーン
少年のかなしみ少女転校す
少年の夢は梯子を雲にかけ
少年の無口世の中分かりかけ
真っ直ぐな道で少年死に急ぐ
少年A頬ずりされた過去もあり
少年の歯が美しい林檎園
逆境に負けず少年白い息
喪主としてもう少年にある自覚
ふるさとのない少年の非行歴
少年に売った包丁気にかかり
少年の抱負拳の中にある
少年の背伸びへ天がおりてくる
おもざしはまだ少年の目に射られ
本に出ていたと少年疑わず
戦争を知らぬヤングの長い脚

少年はもはや風の中にいない。少年のいる風景が変わってしまったことに驚く。

それでは、一九八一年九月号から二〇〇一年八月号までの句から編纂した次の「一万句集」にはどんな少年の句があるか。

それがどうした少年白けきっている
少年のまだすんなりと白き脛
十七歳真面目に励む大多数
もう鳥と少年遊ばなくなった
舵の無い舟少年と乗り合わす
少年Aに手渡す次郎物語
十七歳みんないい顔してますよ
切れ長の眼に少年の意地を見た
逆光の少年ハンドルが利かぬ
十七歳何と危険な歳だろう
ビー玉を覗けば浮かぶ少年期
ローマへの道少年に春の岐路
鳩帰る音少年の眼が光り
私にもあった十七歳の危機
鍵っ子のボールを壁が投げ返す
いつの間に大人になった声変わり
振り返るものか少年風となる

どうやら、少年を取り巻く風景は、もはや元には返らないと見える。少年と大人と世の中と、それぞれの何がどう変わってしまったのか。

白花彼岸花